

○僕の部屋。朝。

僕、朝一人暮らしの部屋で目覚める。カーテンは閉めたまま支度。急いで牛乳を流し込む。スーツを着る。僕がドアを開けると部屋に一筋の光が差し込む。僕がドアを外へ出るとすぐ薄暗い部屋に戻る。

○最寄り駅。朝。

僕、周りの動きに合わせて足早に歩く。警笛や改札の音などがうるさい。

○電車。朝。

満員電車。僕、覇気のない顔。

○会社。昼。

僕、覇気のない顔でキーボードを叩く。キーボードの音、電話、上司の声などがうるさい。

○会社。夜。

僕 「お先に失礼します」
同僚 「おつかれさまです」

○帰路。夜。

僕、とぼとぼと歩く。ため息を吐く。

○街角。夜。

僕、ビルの谷間にひっそりと建つ小さな古い金券ショップを見つめる。そこだけ浮いているような不思議な雰囲気。僕、何故だか惹かれる。

○金券ショップ。夜。

僕、店内に恐る恐る入る。人の影は見えない。

僕 「こんにちは……」

老人 「いらつしゃい」

僕、突然の声に驚く。中にはカウンターに埋もれるように細身の老人が座っている。

老人 「何が欲しいの？」

僕 「あ、いえ、なんとなく気になって立ち寄っただけで……」

老人 「そう、珍しいね」

僕 「珍しい？」

老人 「ここに来るのは目的のある人ばかりだから」

僕 「目的……」

沈黙。僕はガラスケースのチケットに目をやる。

僕 「…あの、どこか遠くに行きたいです」

老人 「どこでもいいの?」

僕 「はい」

細身の老人がガラスケースから一枚のチケットを取り出す。

老人 「はいこれ、一枚で電車乗り放題」

僕 「そんな魔法みたいな切符があるんですか」

老人 「魔法なんかじゃないさ。需要と供給が成り立ってる

だけ」

僕、現実的な言葉に思わず笑ってしまう。

僕 「あはは、そりゃそうか」

老人 「帰りの分も買っとくかい?」

僕 「あー、やめときます」

老人 「じゃあ、千八百円ね」

僕 「二千円で」

老人 「はい、おつり二百円と、魔法の切符一枚ね」

僕 「はは、やっぱり魔法ですか」

老人 「魔法があったらいいのにねえ…」

老人、寂しそうな、何かを諦めているような顔。

僕は黙っておつりと切符を財布にしまう。

僕 「ありがとうございます」

老人 「楽しんで」

僕 「…はい」

○電車。夜。

僕、スーツのまま電車の椅子で揺られる。車窓の外の景色が変わっていく。徐々に田舎に。

○中之条駅。夜。

僕、電車を降りて改札を出る。灯りが少なく東京よりもずっと暗い。

○歩道橋の上。夜。

僕、タバコを吸いながら佇む。

突然見知らぬ少年（信介）が僕に声をかける。

信介 「おじさんどうしたの?」

僕 「…君こそこんな時間にひとり?」

信介 「俺は塾の帰り!」

僕 「そっか、こんな時間まであるんだね」

信介 「うん」

僕 「勉強好き?」

信介 「好きではないけどがんばってるよ」

僕 「えらいね」

信介 「おじさんは仕事好き？」

僕 「あんまり好きじゃないかな。なんだか疲れちゃった」

信介 「そうなんだ」

僕 「そう。それで東京からふらつと逃げてきたんだ」

信介 「悪い大人だね」

僕 「そう、悪い大人」

信介 「ねえ、東京ってどんなところ？」

僕 「どうだろ。僕にはもうよくわかんないや」

信介 「ふーんそっか。ところでおじさん泊まるとこ決まってる？」

僕 「…決まってるない」

信介 「じゃあうちに来なよ」

僕 「それは悪いよ」

信介 「大丈夫、俺ん家民泊やってるんだ！」

僕 「え…！」

信介 「今日他のお客さんもないし！」

僕 「じゃ、じゃあお言葉に甘えて…」

信介 「決まりだね！ついてきて！」

○信介宅。夜。

信介 「ただいま！」

母 「おかえりー」

信介 「お客さん連れてきたよー！」

母 「あら、いらつしやいませ！」

僕 「すみません急に」

母 「いいいえ大歓迎ですよ、お客さんあまり来ないから。

信介、部屋まで案内して差し上げて」

信介 「わかった！」

僕 「(母に)お世話になります」

母 「ゆっくりしていつてくださいなね」

信介 「こっちだよ」

僕 「ありがとう」

僕と信介、廊下を歩く。側の和室に仏壇が見える。

○信介宅、僕の宿泊部屋。夜。

僕 「すごくいい部屋だね」

信介 「でしょ？自慢の我が家です！」

僕 「ありがとう、助かったよ」

信介 「どういたしまして！布団敷くね」

僕 「ありがと。あのさ、さっきなんで僕に声かけてくれ

たの？」

信介 「なんとなく行き場なさそうな感じがした」

僕 「ばれてたんだ」

信介 「あとお客さん来たらうちにお金が入る」

僕 「はは、でも宿も何も準備なかったから助かったよ」

信介 「着替えとかもないの」

僕 「ない」

信介 「お父さんの貸してあげよっか？」

僕 「や、さすがに自分でなんとかするよ」

信介 「お父さんもういないから気にしなくていいよ」

僕 「どういうこと？」

信介 「五年前に亡くなったんだ」

僕 「そうだったんだ」

信介 「うん、今はお母さんと二人」

僕 「そっか」

信介 「服取ってくるね」

僕 「信介くん」

信介 「ん？」

僕 「服借りる前にお線香あげてもいいかな」

信介 「真面目だね、いいよ」

○信介宅、仏壇の前。夜。

信介、線香をあげる。

做って僕も線香をあげる。

二人、仏壇の前で話す。

信介 「人はみんな魔法使いなんだよ」

僕 「どういうこと？」

信介 「おじさんにも魔法が使えるってこと」

僕 「本当かな」

信介 「忘れちゃってるだけだよ」

僕 「信介くんは？使えるの？」

信介 「もちろん！」

僕 「何か見せてほしいな」

信介 「わかってないなあ、魔法ってそういうことじゃないんだよ」

僕 「よくわからないや」

信介 「目つぶってみて」

僕 「急だな」

信介 「いいから！」

僕 「わかった」

信介 「何が見える？」

僕 「何も見えないよ」

信介 「本当に？」

僕 「当たり前じゃん、目をつぶってるんだから」

信介 「当たり前じゃないよ。僕には見えるもん」

僕 「うそ」

信介 「本当。お父さんが教えてくれたんだ、こうして見えるものを忘れるなんて」

僕 「何が見えてるの？」

信介 「それはね……」

僕の耳元に信介が顔を寄せる。ひそひそ声。

信介 「やっぱり教えない」

僕 「なんだよ教えてよ」

信介 「やだ！おやすみ！服は部屋に置いてあるからね！」

僕 「待てよー」

信介、足早に和室を出ていく。

僕、仏壇の方に向き直る。

僕 「服、お借りします。お世話になります」

僕、電気を消して和室を出る。

○信介宅、僕の宿泊部屋。夜。

僕、信介父の服を着て布団に入る。目をつぶって呟く。

僕 「魔法……」

○信介宅。朝。

僕、目を擦りながらダイニングルームへ行く。部屋には朝日が差し込んでいて明るい。

僕 「おはようございます」

母 「おはようございます。朝ごはん食べますよね」

僕 「あ、食べます。ありがとうございます」

僕、席について手を合わせる。

僕 「いただきます」

僕、食べ始める。

僕 「信介くんは？」

母 「もう学校に行きましたよ」

僕 「あそっか、平日ですもんね」

母 「お仕事は大丈夫なんですか？」

僕 「まあ、大丈夫……ではないかもしれないですね」

母 「あらまあ。けどそういう時間も必要ですよ」

僕 「こんなのはじめてですけど、思いのほか気持ちがいいです」

○信介宅の外。翌日の夕方。

僕、散歩から帰ってくる。民宿の前。

信介が外の水道でカバンを洗っている。カバンにはマジック

クで書かれた。インチキ、などの文字。

僕 「信介くん、それ……」

信介、無言で洗い続ける。僕、なんと声をかけたらよいかわからない。

沈黙が続く。信介、口を開く。

信介 「……ねえおじさん、ほんと魔法なんてないのかな」

僕 「……僕にはまだ魔法が何かわからないけど、信介くんには見えるんでしょう」

信介 「よくわからなくなっちゃった」

信介、目に涙を溜めている。僕、信介を抱きしめる。信介、僕が着ている父の服に涙をこぼす。

僕 「大丈夫、大丈夫だよ」

○信介宅。夜。

三人で夜ご飯を食べる。信介は少し元気がない。

僕 「お母さん、あとで信介くんと散歩行ってきてもいいですか？」

母 「あらもちろんですよ。すっかり仲良しね」

僕 「信介くんが良い子だから」

信介は弱々しい笑顔。

信介 「おじさん、褒めても何にも出ないよ」

僕 「美味しいおやつが出るんじゃないかな」

母 「あはは、散歩のあとに用意しますよ」

僕 「やった！」

○町。夜。

二人で歩く。静かな町。

僕 「ここは良い町だね」

信介 「住んでないからそう思うんだよきつと」

僕 「……そうかもね」

二人、とぼとぼと歩く。

僕、細い脇道を見つめる。少しいたずらな表情。

僕 「ねえこっち行ってみようよ」

信介 「僕こっちには行ったことないかも」

○山道。夜。

二人、歩く。道の脇は木々で覆われている。

○山の上の方。夜。

二人、歩く。突然景色が開ける。町を一望できる。二人、立ち止まる。

信介 「この町、こんなに小さかったんだ」

僕 「そうだね、ちっぼけだ」

二人、空を見る。星空。

僕 「きれいだね」

信介 「うん」

僕 「ひろいね」

信介 「うん」

ふたり、目をつぶる。しばらくそのまま。

ふたり、目を開ける。

信介、呟く。

信介 「…ちゃんと見えた」

僕 「…そっか」

○信介宅。夜。

三人 「いただきます！」

三人でデザートを食べる。

僕 「明日、帰ろうと思います」

信介 「え、もう」

母 「もう少しゆっくりしていけばいいのに」

僕 「いえ、もう色々なものをもらいましたから」

信介 「いやだよ」

僕 「疲れたらまた来るよ」

信介 「ほんとに？」

僕 「うん」

信介 「じゃあいいよ、帰してあげる」

僕 「…ありがとうな、信介、ほんとに」

信介 「なんだよかしこまってー」

信介、恥ずかしがる。母と僕、笑う。

○信介宅、玄関口。朝。

僕、来た時のスーツ姿。

僕 「ありがとうございます」

母 「またいらしてくださいね」

僕 「もちろんです。お世話になりました。信介、またね」

信介 「またね、ありがとう」

二人、軽くハグをする。

○電車。朝。

車窓の景色が都会に変わっていく。

○金券ショップ。昼。

僕、店内に入る。カウンターには前の人とは違う太った老
人が座っている。

老人2「何かご用ですか」

僕 「あ…、すみません、間違えました」

僕、店を出る。少し離れたところから店の方を向き直す。
目をつぶる。一人呟く。

僕 「魔法、ありましたよ」

僕、目を開ける。深く息を吸う。ビル群の方へ歩き出す。

(了)